

雜 錄

石 井 重 美 氏

石井重美氏は生物の自然界を觀察審査して、獨創的研究を進められた人である。又その科學的感想を文章に移して、非常に情味に富む卓越の靈筆を揮はれた人である。本誌の讀者は本誌及び彙報に報告せられたる研究論文又科學に關する多くの著述に依つて、氏が篤學の學者であることを夙くに熟知せらるる事と思ふ。氏は昨年夏強度の胃弱症に罹り、食慾頓みに減退して、多年從事したる教育及著述のことに從事する能はず専ら療養に努められたるも、遂に去る七月三十一日、五十一歳を期として長逝せらる。氏の生物に對する觀察力は益々鋭く、自然現象に對する審美眼は益々圓熟せられ、將來大に氏の研究著述の大なるものあるを期待してゐたが、今は其人無く誠に哀愁の感に堪えない。

氏の告別式は八月二日東京に於て基督教司式のもとに行はれ、參列するもの先輩學友多數、牧師の説教、余の履歷朗讀、一高時代よりの恩師五島先生、學友安部能成氏、曾禰武氏の眞情こめた哀悼の辭あり、一同は故人の人格を追慕しつつ遣されたる未亡人及び二人の令息令嬢に弔意を表して散會した。下に當日朗讀したる氏の履歷を揚ぐ。

石井重美君 君は秋山六右衛門氏の次男として静岡縣田方郡内浦村重寺に生まる。沼津小學校を経て伊豆韭山中學より東京郁文館中學に轉じ、明治三十五年同校を卒業して第一高等學校に入り、進んで東京帝國大學理科學部に入り動物學を専攻し、明治四十二年原生動物胞子蟲類の研究を卒業論文として呈出、其課程を卒業せられたり。君は性來自然を愛し、その眞と美の眞相に觸れて生活せられたる尊き人格者なり。大學の業を卒へて後水産の研究に又教育に著述に身を委ねしが、その爲す所常に君が愛着せる自然の探究とその眞理を普及するの一事にありしなり。明治四十三年北海道水産試験場技師を拜命し、同廳の廣き管轄内を、陸に海に實地踏査し、大に鱒漁業其他に貢獻する所ありしも、君の健康は之に堪へず、明治四十五年職を辭して東京に移り、同年水産講習所囑托となり、専ら魚病の研究に從事し又魚病學水産動物學を教授す。君の研究は主に寄生蟲類に向けられ、鯉鰻の胞子蟲類、鰻のリグラ及び甲殻類のペルトガスター又其他の寄生等脚類に關する研究は有名なるものなり。大正十年水産講習所囑托の職を退き、自由の生活に入りて専ら著述に從事し又同時に大正十年曹洞宗大學、大正十二年東洋大學、大正十四年立教大學、昭和三年東京商科學部、昭和七年慈惠會醫科學部等に奉職し自然科學生物學を講義せられたり。想ふに石井君が愛着して親しく研究したる自然は機械的自然にあらず、生氣に満ち汲めども盡きぬ神秘の生物自然界なり。斯かる自然に關する君の知識は自然の法則に順應し、自然の眞と美に感激しつつ楽しく生を營むを以て人生とする事を教ゆるものにして、君は實に斯かる生涯を送られたり。君の著述は此意味に於て誠に世道人心を裨益する所尠なからず。明治三十九年君が高等學校時代に秋美生の名を以て著したる處女作「變動物學」以來、上記の研究に關する論文以外に、著述せられたるものを挙げれば、大正七年「生活の始まり」大正十年「宇宙生物及び人類創成」十一年「自然と科學」十二年「世界の終り」十三年「蟻の社會生活」十三年「天變地異」十三年「生物界の驚異」十五年「科學讀本」昭和二年原著マツケーブの譯著「科學と宗教との鬭争」昭和四年「自然科學總論」昭和五年岩波生物學講座中「日本産魚類寄生蟲の研究」等成書となりたるもの大凡十二種に及びその悉くが君の自然愛好の人格的反映ならざるはなし。君昨年八月以來青年時代よりの慢性胃病重患となり。平塚海岸に轉住して専ら療養に努められしも食慾進まず衰弱日々に加はり、遂に七月三十一日午前八時眠るが如くして天上の人となれり、茲に謹んで君の經歷の一端を述べ以て故人を傳ふ。

中澤毅一